

## 部分は全体に従属する

マルクス主義に忠実でありたいと思うなら、われわれは、この**具体的な事例を具体的に**分析しなければならないが、この事例はいったいなにかかっているか？ それのかかっているのは、ただつぎのことである。(一) ヨーロッパの若干の大きな、またきわめて大きな民族の解放の利益は、小民族の解放運動の利益に優越する。(二) 民主主義の要求は、孤立的にとりあげないで、全ヨーロッパ的な——いまでは、世界的な、と言うべきであるが——規模でとりあげなければならない。

それ以上のなにものでもない。ここには、ポーランドの諸君がわすれてしまい、そしてマルクスがつねに忠実にまもった、あの初歩的な社会主義の原則、すなわち、他民族を抑圧する民族は自由ではありえない、という原則を否認している影さえない。……自決をもふくめた民主主義の個々の要求は、絶対的なものではなくて、一般民主主義的な（今日では一般社会主義的な）**世界的運動の一小部分**である。個々の具体的なばあいには、部分が全体に矛盾することもありうる。そのときには、その部分を否認しなければならない。ある一国での共和主義的運動が、他の国々の教権主義的または金融的＝君主主義的陰謀の道具にすぎないばあいもありうる。そういうばあいには、われわれは、この具体的運動を支持してはならないが、しかし、そういうことを根拠にして、国際社会民主主義の綱領から共和制のスローガンを削除することは、こっけいであろう。(P398~399)

……

「しかし、われわれは大国民相互のあいだの戦争に賛成することはできない。おそらく一千万ないし二千万の人口しかない小民族のおぼつかない解放のために二千万人もの人々の殺戮に賛成することはできない！」もちろん、できない！ だが、それは、われわれが自分の綱領から完全な民族的平等を削除するからではなくて、一国の民主主義派の利益は数個の、**およびすべての国の民主主義派の利益に従属させられなければならないから**である。たとえば、二つの大きな君主国のあいだに一つの小さな君主国が介在しており、その小国の国王が、血縁その他のきずなでこの二つの隣国の君主に「むすびついて」いると仮定しよう。さらに、この小国で共和制を宣言し、**その君主を放逐すれば**、実際には、だれを小国の君主として復位させられるかをめぐって、二つの隣接する大国のあいだに戦争がおこることになると仮定しよう。疑いもなく、このばあいには、国際社会民主主義派全体としても、またこの小国の社会民主党の真に国際主義的な部分も、**君主制を共和制に変えることに反対するであろう**。君主制を共和制に代えることは、絶対的なものではなく、民主主義的諸要求のうちの一つであって、民主主義派（もちろん、それ以上に社会主義的プロレタリアート）全体の利益に従属している。たしかに、こういうばあいには、どの国の社会民主主義者のあいだにも、すこしも意見の相違はおこらないであろう。しかし、**このことを根拠として**、ある社会民主主義者が国際社会民主主義運動全体の綱領から共和制のスローガンを削除するように提案するなら、彼はきっと、狂人と見なされるであろう。人は、彼にむかってこう言うだろう。やはり**一般と特殊**との初歩的な論理上の区別をわすれてはいけない、と。

この一例はわれわれを、すこしばかり別の側面から、労働者階級の**国際主義的教育**の間

題に行きあたらせる。こういう教育が必要であり、さしせまって重要であることについては、ツィンメルヴァルド左派のあいだに意見の相違があろうとは考えられないが、この教育は、大きな抑圧民族と小さな被抑圧民族、併合民族と被併合民族とで、**具体的に同一なもの**でありうるだろうか？

あきらかに、ありえない。**あらゆる**民族の完全な同権、そのもっとも緊密な接近と将来における**融合**という同じ一つの目標にたいする道に、ここではあきらかに、ちがった具体的な道筋をとおっていく。それは、たとえば、このページの中央にある一点にむかう道は、ページの一端からは左に、その反対の端からは右に、すすむのと同じである。もし、他民族を抑圧し併合する大民族の社会民主主義者が、一般に諸民族の融合を信奉しながら、「自国の」ニコライ二世、「自国の」ヴィルヘルム、ジョージ、ポアンカレその他**もまた**小民族との（併合による）**融合**に——ニコライ二世はガリチアとの「融合」に、ヴィルヘルム二世はベルギーとの「融合」に、等々——**賛成**していることを一瞬間でもわすれるなら、このような社会民主主義者は、理論のうえではこっけいな空論家となり、実践のうえでは帝国主義の助手となるであろう。

抑圧国における労働者の国際主義的教育の重点は、ぜひとも、労働者が被抑圧国の分離の自由を説き主張するようにならせることでなければならない。これなしには国際主義は**ない**。われわれは、抑圧民族の社会民主主義者でこういう宣伝を行わないものを、すべて帝国主義者として、ろくでなしとして、とりあつかう権利があり、義務がある。たとえこの分離の**機会**が、社会主義の実現以前にはわずか千度に一度しか可能でなく、「実現でき」ないとしても、これは、無条件の要求である。

われわれは、民族的差異にたいして「無関心」となるように労働者を教育する義務を負っている。このことには争う余地がない。しかし、それは**併合主義者**の無関心であってはならない。抑圧民族の成員は、小民族が、彼ら自身の共感にしたがって、**前者の**国家に帰属しようが、**隣りの**国家に所属しようが、それとも、自立しようが、それには「無関心」でなければならない。こういう「無関心」がなければ、彼らは社会民主主義者ではない。国際派社会民主主義者であるためには自分のことだけを**考えない**で、すべての民族の利益、その普遍的な自由と同権を、**自分の民族に優越させなければならない**。「理論」のうえではみなこのことに同意しているが、実践のうえではまさに併合主義的無関心が発揮されている。ここに悪の根源がある。

これとは反対に、小民族の社会民主主義者は、彼らの煽動の重点を、われわれの一般的定式の**第二の**言葉、すなわち諸民族の「自由意志による**結合**」におかななければならない。彼らが自民族の政治的独立に賛成しようと、自民族のX、Y、Zなどの隣接国家への編入に賛成しようと、国際主義者としての自分の義務に違反することにはならない。しかし、彼らは、どんなばあいにも、小民族的な偏狭、閉鎖性、分立に**反対**し、全体的なもの、全般的なものを考慮に入れるために、部分的なものの利益を全般的なものの利益に従属させるために、たたかわなければならない。

問題をふかく考えたことのない人々は、抑圧民族の社会民主主義者が「**分離の自由**」を主張し、被抑圧民族の社会民主主義者が「**結合の自由**」を主張するのは「矛盾している」と考える。しかし、すこし考えてみれば、国際主義と民族融合とにいたる道、**現在の状態**からこの目標にいたる道は、**ほかにはない**し、またありえないことがわかる。

注) ……は青山の略

第 22 卷 P398~406 『自決にかんする討論の総括』

1916 年 7 月に執筆

## ポイント

自決をもふくめた民主主義の個々の要求は、絶対的なものではなくて、一般民主主義的な世界的運動の一小部分である。個々の具体的なばあいには、部分が全体に矛盾することもありうる。そのときには、その部分を否認しなければならない。一国の民主主義派の利益は数個の、およびすべての国の民主主義派の利益に従属させられなければならない。

たとえば、二つの大きな君主国のあいだに一つの小さな君主国が介在しており、その小国の国王が、血縁その他のきずなどでこの二つの隣国の君主に「むすびついて」いると仮定しよう。さらに、この小国で共和制を宣言し、その君主を放逐すれば、実際には、だれを小国の君主として復位させられるかをめぐって、二つの隣接する大国のあいだに戦争がおこることになると仮定しよう。疑いもなく、このばあいには、国際社会民主主義派全体としても、またこの小国の社会民主党の真に国際主義的な部分も、君主制を共和制に変えることに反対するであろう。なぜなら、君主制を共和制に代えることは、絶対的なものではなく、民主主義的諸要求のうちの一つであって、民主主義派全体の利益に従属しているからである。

また、労働者階級の国際主義的教育は、大きな抑圧民族と小さな被抑圧民族、併合民族と被併合民族とは同一なものではない。

抑圧国における労働者の国際主義的教育の重点は、ぜひとも、労働者が被抑圧国の分離の自由を説き主張するようにならせることでなければならない。これなしには国際主義はない。われわれは、抑圧民族の社会民主主義者でこういう宣伝を行わないものを、すべて帝国主義者として、ろくでなしとして、とりあつかう権利があり、義務がある。これは、無条件の要求である。しかし、小民族の社会民主主義者は、これとは反対に、彼らの煽動の重点を諸民族の「自由意志による結合」におかなければならない。

問題をふかく考えたことのない人々は、抑圧民族の社会民主主義者が「分離の自由」を主張し、被抑圧民族の社会民主主義者が「結合の自由」を主張するのは「矛盾している」と考える。しかし、国際主義と民族融合とにいたる道、現在の状態からこの目標にいたる道は、ほかにはないし、またありえない。

## コメント

小国の社会民主主義派も二大国の社会民主主義派も共和制をめざして戦うべきであり、各国の自決(独立)をめざして戦うべきである。「部分は全体に従属する」という理論は、正確な分析がない場合、大国主義的に利用されるおそれがある。